

奴隷少年を奴隷少女と3Pエッチでマゾ変態男の娘に変える



001

奴隷少年を奴隷少女と3Pエッチでマゾ変態男の娘に変える



002

主な登場人物

エルク……主人公。本職は傭兵で変える場所に温もりを求めて奴隷の家族を作った。元マシユランという女の子の奴隷もいたが、イールという容姿が女の子に見える男の子の奴隷を買い、家族に迎えた。

イール……奴隷の前は少しだけ裕福な暮らしが出来ていて北の方で過ごしていた。奴隷となり、エルクに買われ彼の昔話を聞きながら身体を使う事を知る。そのなかでもルクの優しさに触れながら、エルクを信頼できるか見極めていた。

シユラン……一番最初にエルクに買われていた奴隷。エルクの調教でマゾ気質を持ちながら、サディストな一面も兼ね備えている。エルク自身を受け入れて奴隷として、家族として彼と一緒に過ごしている。

目次

奴隷少年と主人	005
男の娘は快楽を知る	031
爆発寸前で見せつけエッチ	058
三人で限界セックス	079
二人の奴隷家族	096

(一部試読範囲)

男の娘は快樂を知る

イールを迎えてから一週間ほどが経過した。

外で剣の素振りをしながら、シユランとイールが作ってくれる朝食を待つ。

一週間前のあの後、ご飯を食べお風呂に浸かり、相当疲れていたのかすぐに眠って、その日はイールと大した会話は出来なかった。

シユランと、イールの調教について話し合いをして、ひとまず一週間はこの生活に慣れてもらうために手は出さないようにして様子を見る。

まだ少しぎこちないが、俺のことはエルク様と、シユランのことはシユラ姉ちゃんと呼ぶようになって、シユランも姉ちゃんという響きにもどかしさを感じながらも満足げな嬉しそうな表情を浮かべていた。

イールもシユランに釣られてか、衣服は着ないで元々の奴隷服を身につけるだけなのはどうかしたい。

シユラン同様何か案が無いか考えていなければいけないな。

一週間という短い期間でこの生活にも馴染みはじめ、適応能力がかなり高い様子

だったが、ハット帽の商人が言っていたように、貴族までとは行かずともいい暮らしをしていたせいも、主従の関係を崩そうとする意識は無い様だった。

元々従わせたくて買ったわけでもないため、シュランほど気さくに接して欲しい。そのためには性行為が一番手っ取り早い事はシュランで経験している。

そのシュランも三日前に近づいてはいけないと伝えていた森の方へ行ったためお仕置き中ではあるが、それも今日で解放だ。

それに合わせてイールの調教も今日辺りから動いてもいいかもしれない。

計画を頭の中で組み上げていると、シュランが顔を赤らめ股をもじもじと擦らせながら朝食が出来たと呼びに来てくれた。

「エルク様……その……朝食の後に……」
蕩けるような吐息を漏らし、色っぽい雰囲気漂わせている。

それも仕方がない。というのも、お仕置きというのは貞操帯を身につけさせ媚薬を飲ませて放置するというモノで、お風呂では外すが自分から弄らないように俺が洗う。

その生活を三日続けているシュランは常に発情してしまっているという事だ。
「今日の夜、シークが大丈夫そうならやるつもりだ。シュランはそのあとで解放す

る」

「そんな……もう、あの森には、近づきませんから……身体がずっと熱くて……」

この国も安全というわけではないことは傭兵の仕事からよく知っている。

シユランの入った森は狩りをしていい区域になっており、時折兎や猪の獣を狩りに行く人も居るが、同時に盗賊や強姦魔も潜んでいる。

あの森へは一人で行かせるわけには行かない。

「俺が常に助けられる場所にいるわけではない。もしもがあつてからでは遅いんだ。今日の夜までは反省してろ」

「……はい……」

内側から火照っている身体をフラフラと揺らしながら家の中に入っていった。

俺も井戸水を頭からかぶり、元々持っていた服に着替えて家の中に戻る。

机には既に料理が並べられており、パン一つと、レンズ豆と兎肉のトマト煮が並べられていた。

イールは席に着き待っていてくれたが、彼の股間部分が少し膨らんでいるように見える。

朝から、吐息を漏らして発情している歳の近い女性がいると仕方もない。

シュランの反応で性に対して恐怖心を煽る心配もあったが、イールも純粋な男だという事か。

「すまないイール。待たせたな」

「い、いえ……とんでもありません」

シュランはイールの隣に座り、イールの対面に俺が座る。

三人で手を合わせて食事を始めた。

食事中もイールはシュランが気になるように目を背けても吐息が聞こえ、食事に集中できていないようだ。

シュランには申し訳ないが、イールの心を揺さぶるいいスパイスになってくれている。

今日の夜が待ち遠しい限りだ。

食事を終え、シュランと俺でイールに料理や、洗濯、家事の効率のいい動きを一通り教えておく。

それぞれの役割分担の話も進み、まだここにきて一週間とは思えない程の仕事スピードを見せる。

俺の仕事が無くなるほどには飲み込みも早く、シユランにも話し相手が出来て傭兵の仕事に集中できそうだ。

文字の読み書きは問題なく学べているらしく、勉強も必要ないなら買い出しの仕事も問題なくこなしてくれる事だろう。

シユランは勉学には弱く、文字の読み書きは苦手だ。

育ちの違いもあるのだろうが、シユランは元々貧しい暮らしをして勉学どころでは無かっただろうし、子どもに学ばせるかどうかは任意とされていて、家の仕事を手伝わせても、学ばせても、遊ばせても問題は無い。

一人で生きていくなら文字の読み書きは出来ないと厳しいところはあるが、それを放置する親も多く、読み書きできる子どもは少なく仕事探しては重宝されるほどだ。

その時のためにも、シユランとイールにはそれなりに学びをさせておきたい。

機会があれば商人に商売の仕方やお金の計算を学ばせてもいいかもしれないな。

シユランと俺でイールに家事を教え、イールと俺でシユランに文字を教える。

支え合える関係性も築けて安心していううちに、外は暗くなりついには夜を迎えた。

食事を終え、お風呂を済ませシユランから貞操帯と取り外し、部屋で待機させて外で星空を眺めていたイールの元へ向かう。

「今日は雲も少なくて綺麗だな」

背後から声を掛けると、びっくりさせてしまったように肩を跳ねさせ素早く振り返った。

「すまない、驚かせたな」

「あ、いえ……大丈夫です」

「夜空には焚火とホットミルクが合う。少しどうだ？」

「……エルク様のお誘いであれば、是非」

俺は外で石を積み上げている簡易的な竈のようところで薪に火をつけ、カップに牛乳を入れ温める。

イールは真面目な子で主従の概念を取り除くのは難しいかもしれない。

今晚でどれだけ取り除くことが出来るだろうか。

容姿で時折忘れてしまっているが、女相手だけでなく男相手の性行為になるが、どう攻めるのが一番いいかを悩んでいると、牛乳がいくらいいぐらいの温度になり、それぞれのコップに移し入れる。

「シユラ姉ちゃんは……」

「今日はもう自室に戻っていったよ」

「そう、ですか……」

「イール的には、ココでの生活はどうだ？ 不自由なところがあれば言ってくれ」

「……楽しくさせて、頂いてます」

「……そうか……、もう少し主従の関係を砕いてくれて構わないが」

「そんな……、奴隷の僕をこんなに親切に接してただけてるだけで……」

「イールには昔話をしただろう。あまり主従を気にしないでいい」

「……」

真面目だからこそ葛藤もあるのだろう。

ただの社交辞令にしか聞こえていないのかもしれない。

イール自身その見極めが難しく、険しい表情を浮かべるだけでバチバチと焚火のはじける音が聞こえるだけの時間が過ぎていく。

「……後で俺の部屋に來い。……何をするか分かってるだろ、怖ければ自室に戻って寝てもいい。選択は委ねるし、来なくてもイールを見捨てはしない」

イールは俺の言葉を聞き、焚火を見ながらどうするか考え始めたようで、俺は先

に自室に戻っておくことにした。

コップに細工を仕掛け、イールのコップの底には媚薬を塗っておいた。

これで、部屋に来る確率が少しは上がっているといいが……。

警戒心と緊張は感度を下げる。

リラックス効果のあるアロマキャンドルの火を付けておく。

そこに三度のノックの後ドアを開けてゆっくりとイールは入ってきた。

「……いらっしやい」

どれだけ綺麗ごとを並べても、可愛い容姿をした男の子とエッチが出来ると思うとワクワクする自分もいる。

どちらが本心か自分でも分からなくなってきた、曖昧な笑みを浮かべるだけになっちゃってしまっていた。

それにイールの性格なら媚薬も使わず拒否権があっても、部屋に来ていたかもしれない。

後は責任を持って、痛くしないようにイールを快楽に誘わせるとしよう。

俺はベッドに深く座り、足を広げその隙間にイールを座らせた。

イールは恐怖からか、緊張からか、一言も喋らないまま、俺にされるがままに待っていた。

アロマキャンドルで、は気休めかもしれないが対策はしているため大丈夫だろうと信じる。

ゆっくりとイールの太腿に右手を乗せ、指を滑らせ親指で内太腿をフェザータツチで撫でること^{すべ}でやらしい気分を作っていく。

太腿は柔らかく滑やかでありながらも、奥には少しの筋肉も付いている。肌質は女のようにでありながら、何処か男性らしさがほのかに香る。

そんな太腿も股に近づけていくと、イールはキュッと肩を萎めて小さくなった。

「怖いなら止めるか？」

「——い、いえ……僕は、大丈夫です……」

口ではそういうモノの、身体の震えは緊張というよりは恐怖に近いモノに思える。そういう時は核心的なところには触れず、その近辺で焦らして気持ちを高ぶらせるしかない。

奴隷服の大きく広がった脇下の隙間から、左手を忍ばせ、脇腹から細いお腹の方を撫でて、そーっと胸元まで上げ、胸の形を確認するように付け根を指でなぞり、

再び脇腹に戻る。

あくまで触れるか触れないかの距離を保ちながら何度も繰り返しているうちに、イールも徐々にやらしい気持ちが進み上げてきて、媚薬も早く回っていく。

恐怖感で震えていた身体も、乱暴に扱われるかもしれないという疑念は、乱暴に扱われないと確信に変わり、警戒しなくなった分アロマキャンドルでのリラクゼーション効果で落ち着いていた。

恐怖心が期待感へ変化し、興奮を上げていく。

それが出来れば快感を感じる身体になりやすい。

右手も太腿から離れ、右の袖口から中に忍ばせお腹を手のひらで抑え、背中の方に流れ、脇の下を指先が擦れる。

「大丈夫そうか？」

「っ……はい、だい……丈夫……です」

筋肉が力んだり緩んだりを繰り返して、呼吸は小刻みで浅いものに変わっていく。服から一度両手を抜いて、脇下からイールの前に手を出し乳首に触れないように、その周辺を、指を折り曲げながら近づけては離して距離を置く動作を繰り返す。

触れるか触れないかのほどかしさの中、奴隷服の中で小さかったペニスを膨らま

せて、服が不自然に盛り上がっていた。

その興奮を増幅させるために、一度優しく服越しに乳首の先端をチョンっと触れて離す。

「はッ——っ……」

突然触られた驚きと、乳首に触れた胸の奥に広がるような快感でイールは吐息と一緒に声を漏らし、呼吸を止めて口を閉じる。

恥ずかしかったのか首を下に傾け耳を赤く染めていた。

その初々しい反応に、性欲を撫でられ苛めたい欲望に火がついてしまう。

再度服の上から乳首の周りをグルグルと円を描いて、その円を小さくしていく。

そしてまたゆっくりと乳首の先端をチョンと優しく触れると、次は声を出しはしないが腰を丸め俺の手から逃げようとする。

「男で乳首が弱いのか。珍しいな」

「い、違い、ます……びっくり、ただけ……です」

乳首で感じるものが恥ずかしいのか、人に触られて見られながら感じた事か、はたまたその両方か。

どれにせよいい反応が見れて心が踊る。

イールが股をグツと閉じて、もぞもぞと動かしているのが気になり、乳首から手を動かし両太腿に手を乗せる。

「大丈夫、力抜いて……」

イールは俺の指示通り素直に力を抜いてくれて、左手は太腿を滑らせ、右手は骨盤に手を添えながら足を広げさせた。

奴隷服の裾から左手を入れて胸の方へ上げ、クリッと指を曲げ乳首を下から上に軽く弾く。

「んっ——」

イールは声が出やすいらしく少し刺激を入れるだけで、声を我慢するために全身に力を入れ、開いたばかりの足をグツと閉じ女性のように足を振り合わせる。

乳首がこれだけ弱いと、エッチ好きな男の娘にするのもそう難しくはないかもしれない。

それにエッチが好きになってくれれば、すぐに対等な接し方になってくれて、性欲が溜まっている時の相手にもなってくれるだろうし嬉しい限りだ。

だからこそ初めての時は焦らして、もどかしい快感に身を焦がし自分から欲しがるように意識させる。

「イールの可愛らしく、気持ちよさそうに漏れる声を聞くためにまた足を広げさせる。」

開いた足を閉じれないように、背後から俺の足をイールの両足の上に乗せて足首を絡ませ左右に広げるように力を入れ開脚状態を維持させた。

「あ、の……」

「痛くはないだろ？」

「……はい」

そして袖口から奴隷服の中に手を忍ばせ本格的に攻めていく。

「チョン、チョン」と一秒に一回のペースで乳首を弾く度に、足を閉じようとする動きを俺の絡ませた足でグツと開くところまで開いて羞恥心を煽る。

「奴隷服の盛り上がっているペニスの辺りには、じわじわとシミが出来てカウパーが溢れ出ている。」

「奴隷服汚れてしまったな」

「こ、これは、違うんでっ——んう……」

乳首を弾くと甘い矯正を漏らしながら、息を止めて、小さく勃起させたペニスをビクンと奴隷服の下で跳ねさせる。

硬くピンと勃起させた乳首の側面をクルクルとなぞりながら、気持ちいいか聞いてみる。

「気持ちいい……いい……ですう——あ……んい……」

「乳首だけでそんな悶えて、大丈夫か？」

「ん……うふあ——……は……い……」

イールの背中から服越しに体が熱くなっているのを感じ、ドクドクと鼓動が速くなっていく。

側面の中でも乳首の下に触れる時にビクッと身体を反応させて、乱れる呼吸が湿り気と共にエッチな雰囲気を増すばかりだ。

左の乳首の先端に指先を置いて上下左右に倒しながら、右手で下腹部を優しくなでペニスへの期待感を高め、イールの目は細くなっていた。

声の出していない呼吸音でさえ、俺は聴覚を刺激され胸が高鳴りペニスへ血液が素早く流れる。

イールがビクビクと腰を小さく跳ねさせる度に、俺の勃起したペニスが彼の腰でグツと押し付けられるのが気持ちよく、無意識に俺も腰を擦り合わせに行っていた。

「え、エルク……様、あ……んい……」

腰を擦り付ける俺に困惑の色を見せながらも、その動きが色欲の制御を緩ませて
いる。

「あ……いあ……んう……」

イールの元の声も可愛らしいが、喘ぎ声も女性に近くシュランのことも考えてか
必死に抑えようとする中で漏らしてしまう吐息が好奇心をも高ぶらせる。

イールの育ちや奴隷経験の無さも相まって人とする性行為の経験は無いだろう。

乳首で艶やかな声を響かせ、浅く呼吸を乱し、身体に汗を滲ませながら、腰をク
ネクネと悶えてしまうほどに弱い身体で、可愛らしいペニスを扱くとどれほどまで
の快楽が襲うのか。

下腹部から両乳首の攻めに戻り、親指と人差し指、中指の三本の指をわさわさと
柔らかな動きでランダムに折り曲げ、無作為に弾いたり抓んだりして刺激する。

「いッ——ああい……はあ……っ……ああ、ふうっ……」

刺激に慣れないように強弱も付けて、乳首から広がる脳に届く快感に集中させて
いく。

足を閉じないようにしているせいか、イールの艶やかな喘ぎ声は少し大きくなり、
部屋の隙間からその声は漏れ、シュランにも聞こえてしまっそうだ。

「まだ乳首しか触ってないぞ、乳首だけでイケそうだな」

「そっんな……あ、ことお……あいませッ——はあッ……んん……」

身体をうねりながら悶えるせいで、奴隷服のいろんな所にカウパーの染みが出来ていて、その膨れ上がるペニスを見て男だという事がより感性を刺激し、腰にペニスを擦り付けるスピードが早まる。

「腰……あて、らあえるとお……変なツ気分になう……」

イールの言う通り、ペニスを強く押し付ける度に乳首の固さは増し、腰をビクビクと震わせて射精感とも違うもどかしい感覚が全身を支配されていた。

その射精感と違う快感を射精感に繋げるためにイールは自らペニスへと手を伸ばそうとしている。

「イール、まだ触ったらダメだ」

快感に支配されたイールに俺の声は届かず乳首への刺激を止め、腰の動きも止めて彼の両手首をガシツツと掴んで、ペニスに触れようとすると手を阻止した。

すると足を閉じて太腿でペニスに触れようと必死に力を入れてるが、傭兵の俺の力には勝てず、足を閉じることも出来ないまま逃げ道の無い快感が身体の中を渦巻く。

「エ、ルク様！ ……おね、がい……………しまっあ……………す……………もう……………」

ホットミルクに溶けていた媚薬の効果も少なからずあるのだろうが、乳首だけを攻めてペニスに一切の刺激を与えない男性には、もどかしすぎる普段の自慰とは違う快感でイールからいつもの冷静さが無くなってきていた。

「イール、どうしても触りたいのか？」

「おね、がい……………ツします……………」

「何処を触りたいんだ？」

「……………あ……………こ、こを……………」

イールは触れてもいないのに、ビクン、ビクンと跳ねさせるペニスを寂しそうな表情を浮かべながらジツと見つめる。

「……………」

何処かをハッキリ言うまでは手首も離さず、何処も刺激をしないまま身体の中で暴れる快感で焦らすだけだ。

「え、えるく……………あま……………ツんあ……………」

「何処か分からなかった」

「こ、こ……………触り、たい……………です……………」

「……」

「あっ——んん……………」

「喋れないほど疲れたなら、今日はもう終るとしようか」

「ッ！ まっあて……………ください……………」

乳首だけを触られ、ビンビンに勃起したペニスが触れられず、射精も出来ない焦らしで、もどかしいまま終らされる。

触ってもいけない身体をビクビクと震わせながら、その辛さと天秤に掛け、イールは覚悟を決めた様だった。

「お……………ちゃん……………んに……………あり……………たい、です……………」

「……………もう一度、聞こえなかった」

元々ほんのりと赤かった耳を真赤に染め、勇気を出す。

「おちん、ちん……………に……………触りたい、です……………」

「そう言っていたんだな、何度も言わせてすまない」

わざとらしくシラを切り、手首を掴む力を緩める。

「でも駄目だ、イール」

「ッ——なんで……………」

「俺は聞こえないから聞き返したただけだ。どうしても触りたいなら……そうだな、乳首なら自分で触ってもいい」

「……………」

素直に、ちゃんと言えばペニスを触り射精できると思い込んでいたイールは、俺の言葉に涙目になりながらも素直にペニスからは手を遠ざける。

服を上にも捲し上げて、綺麗なペニスや肌、身体のラインが露わになった。

試読はここまでとなります。

この作品、パーツの転載、複製、配布を禁止します。

サークル青。 トウエスイ